

鹿嶋の七日火（根小屋町）の調査報告

鈴木 英恵

はじめに

高崎市根小屋町の鹿島宮に伝承される「鹿嶋の七日火」⁽¹⁾は、花火を使う夏の民俗行事で、約6メートルある4つの万灯に仕掛けた花火を点火させる。もともと、万灯は先祖や故人を偲ぶ供養の法会で用いるが、伝承地では万灯と花火が一体化されていることに、特徴がある。

この行事は江戸時代に始まったと伝わる。第二次世界大戦中に一時中断したが、昭和初期に根小屋町で赤痢が流行したため、その厄払いとして花火を上げ、今日まで継続されている。現在、鹿島宮の氏子が制作するのは、一つは万灯、もう一つが仕掛け花火の骨組みとなる部分で、竹を用いて十字型に組んだものを作る。この骨組みに専門の花火師が火薬、煙火玉をつける。

伝承者の佐藤隆夫氏（昭和19年<1944>生まれ）によると、万灯の仕掛け花火は、もともと地域の人びとの手作り花火であった。火薬と鉄粉の調合や分量は伝統の技術として、代々地元の高齢男性に民俗知識として共有され⁽²⁾、調合した火薬を万灯に取り付けるまでの工程を、伝承地のなかで行ってきた。女性が花火作りに携わることはなかった。万灯から光を放つような花火、そして暗闇の中に滝のように降り注ぐ火花は神秘的で、かつては遠方から多数の見物客が押し寄せた。上信電鉄が臨時で「七日火列車」を運行させるほどであった。お昼ごろから見物客がやって来て、参道に露店が並んで賑わった。娯楽が少なかった時代、鹿島宮での花火は近隣の人びとにとっても楽しみな行事であった。

時代の流れの中で、花火の作り手は変化した。昭和25年（1950）に「火薬類取締法」が施行されると、自家製火薬と手作り花火は禁止された。この法により、花火は地元の人びとの手から、専門の花火師の手に委ねられるようになった。ここでは、過去から現在にわたる伝承状況をみていく。万灯の仕掛け花火の継承者と花火師に着目し、今まで伝えられてきた鹿嶋の七日火についての調査報告をする。

1. 鹿嶋の七日火をめぐる継承方法

（1）七日火の由来と歴史

鹿島信仰の總本社は茨城県鹿嶋市宮中に鎮座する鹿島神宮で、東日本を中心に古くから航海の守護神、軍神、武神として祀られてきた。高崎市根小屋町の鹿島宮の由来や建立年等に関する文字史料はとくにない⁽³⁾。



写真1 鹿島宮の社殿（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影

令和7年（2025）8月2日時点で、4つの組（現在の1班から7班）が万灯の仕掛け花火を作る。その4つの組とは、^{そりめ}反目西、反目東、下・中・下の二、鹿嶋東・鹿嶋西である。単独で万灯の仕掛け花火を作るのが反目西と反目東、3つの組（班）で作るのが下・中・下の二、2つの組（班）では鹿嶋東・鹿嶋西で、それぞれ共同で一基の万灯を作る。これら4つの組（1班から7班）は祭りの主催者でもある。各班に班長がそれぞれ1人、計7人の班長がいる。主催者は一組あたり1

0人くらいである。計4つの組（①反目西、②反目東、③下・中・下の二、④鹿嶋東・鹿嶋西）で総勢40人ほどである。各組がそれぞれ一基の万灯の仕掛け花火を準備し、本番では一基ずつに火を点ける。昔から、前述した4つの組が作ると決まっていた。最近の観客は近隣を中心に100人ほどで、近年は近隣の高崎商科大学の学生も加わっている。

前述した各班の班長とは別に、毎年交代でまわって来るのが当番町である。当番町はコウリモチ（行李持ち）と呼ばれ、昔からの役職名が今日も適用される。行李とは、柳や竹で編んだ箱型の容器である。かつて、根小屋では責任者が行李に文書を入れて回していたことから、いまもこの役職名で通じている。7班の中から班長代表者を決め、この代表者がその年の責任者の行李持ちとなる。祭事を取り仕切るのは行李持ちで、その年の采配を前年度の引継ぎもなく振る。令和7年の行李持ちは茂木嘉之氏である。茂木氏がその年の開催要項を作り、祭りを取り仕切る。ちなみに、令和7年度の開催は8月の第一土曜日であった。

近年、鹿嶋の七日火の日程は年によって異なる。過去に毎年8月7日に実施したが、平成29年（2017）から祭りの実施日を8月第二土曜日に変更した。日にちを変更するにあたり、佐藤隆夫氏（高崎市根小屋町第二区長）は「なぜ、8月7日に七日火を行うのか」と改めて考え、従来から続いてきた祭り日の変更理由を地域の人びとに理解してもらうことを重視し、区長の立場として地域の人びとから承認を得る必要があった。そのような折、根小屋町のある旧家から鹿島宮の七日火に関連する古文書が発見された。書かれた年代は現在確認中であるが、^{ながせさぬきのどう}長瀬讚岐当なる人物（詳細不明）が鹿島大明神と七日火の由来について書いたものであった。大宝元年（701）8月8日に羅刹国（アマテラス）の鬼が日本にやって来て、各国の氏子を襲ったが、鹿島大明神をはじめ各国の神々が鬼を退治したこと、見事に氏子を守り抜き勝利した日（かつて7日の日没が8日の朝とみなされた）として、7日の日没に「鹿島大明神や、その他の神たちが近くにおられるよう」と感じるように、神々のところへ詣でて感謝すべきである」〔山崎編 2016 68〕

とした（4）。この古文書の解読により、氏子も8月7日に七日火を行うことに意味があると理解し、日程変更を受け入れた。現在、伝承地では七日火の行事とともに、この鹿島宮に関する古文書が受け継がれている。

七日火の花火の財源は、鹿島宮の氏子の寄付によるものである。根小屋町第二町内（全7班）には、約100戸以上の家がある。各班の班長がそれぞれ一軒ずつ訪ねて寄付金を募る。七日火への寄付は、鹿島宮に寄附することと同じ意味である。家族に不幸があった家は寄付金を出さない。一方、家に喜ばしいことがあった場合は、多額の寄付金を出す人もいた。たとえば孫の誕生、結婚、新築、年祝いの米寿、結婚50周年記念の金婚式などの祝事である。だが、このような習慣も約20年前から少なくなった。

（2）万灯の手作り仕掛け花火

昭和20年（1945）初頭の万灯仕掛け花火について述べてみたい。佐藤隆夫氏の家は大きな農家で、幼少のころには風通しのよい長屋門があった。7月になると、農作業の合間に近所の7人から10人位の壮年がこの長屋門に集まって、万灯花火の四基分、さらに打ち上げ花火分の火薬を用意した。当時から打ち上げ花火も行っていた。花火の火薬は、黒色火薬、黒炭、鉄粉、灰（桐木の枝）を薬研で細粉にして調合した（5）。花火の火薬の分量を誤って、顔が真っ黒になる人もいた。火薬を調合中に、近くで子ども達がゴム草履を履いて走り回っていると、埃が舞うので「ゴム草履で走るな！灰のなかに埃が入る」と怒られることもあった。

万灯は、高さ約4メートルから6メートルある竹の先端に取り付ける。そのため、広い庭を持つ農家や養蚕農家で準備をした。手作りの仕掛け花火の部分は、竹を十字に組んだ骨組みを作り、これを万灯の下に取り付けた。この十字型の部分に火薬をつけた。十字型の竹の長さ、本数は各組さまざまで、取り付ける火薬の分量も統一していかなかった。こうした理由から、各組独自の手作り花火が作られた。昭和20年初頭、伝承地の人びとは農事暦に沿った休み日であったことから、8月7日の祭り日に間に合うように、皆で集まって万灯の仕掛け花火の準備をした（6）。

昭和30年（1955）ごろは、4つの組（班）の他にも、根小屋町中郷と下村がハナマンドウ（花万灯）を作って七日火の祭りに参加していた。花万灯は仕掛け花火ではなく、万灯の上部に3本から6本ほどの細く切った竹を垂らし、そこに和紙で作った花をつけた。万灯には赤い塗料の蠟燭を灯す、華やかなものであった。佐藤氏によると「花火をイメージしたのが、（根小屋町中郷と下村の）花万灯」と話す。万灯の高さは、仕掛け花火の万灯と同じ位で4メートルほどであった。花万灯を灯す蠟燭は、花火のように一瞬で終わりではなく、長時間にわたって辺り全体が明るくなり、幻想的で美しかった。現在、このような花万灯は作られていない。

(3) 鹿嶋の七日火と高崎まつりの花火



写真2 高崎ふるさとまつりの花火

(高崎市立中央図書館蔵)

昭和時代の鹿嶋の七日火の歴史を振り返るにあたり、高崎とのかかわりについて報告したい。以下では、『旧市域の祭りと町内会 現代の祭りとその背景』(高崎市編 1996)から高崎ふるさとまつりの内容を概観し、七日火との関連を見ていきたい。現在の高崎まつりの前身は、昭和50年(1975)に第一回が催された高崎ふるさとまつりで、昭和50年代の花火は鹿島(ママ)の七日火であった〔高崎市編 1996 口絵写真2〕。

写真をよく見ると、万灯の仕掛け花火の周りに多数の観客がいて、花火の外側には街路灯の灯が見える。4基の

万灯に一斉に火が点き、打ち上げ花火のような美しい火花が降り注いでいる。万灯下部にもたくさんの火薬がつき、迫力ある花火であったことがわかる。

高崎ふるさとまつりは、昭和50年8月18日に開催された。この年はちょうど市制75周年の記念すべき年でもあったが(7)、オイルショックの影響もあり、市では記念行事の山車巡行等を行わない方針であった。一方、山車を保有する各町では山車巡行を切望していた。時を同じくしてJC(高崎青年会議所)が中高生の作文コンクール、郷土芸能祭り等を中心とした催しを計画していた。これは行政主導ではない、市民側からの手作りのまつりとして「高崎ふるさとまつり」が開催されたのである。内容は山車巡行(市内にある山車35台のうち、23台が出場)、神楽や獅子舞の郷土芸能、盆踊り、群馬交響楽団の演奏会、お茶会、中高生の作文コンクールなどであった。当時のまつりの拠点は音楽センターで、ここできさまざまな催し物が行われた。音楽センター内では獅子舞と神楽、無着盛恭氏の講演会「子供と教育」、群馬交響楽団の演奏会が開かれた。同センター外では、子どもの遊びコーナー、どじょうつかみ、スイカ割りなどがあった。花火大会は音楽センターの中庭で子ども花火をやる程度であったが、後に郷土芸能の一部に花火部門が設けられ、鹿島(ママ)の七日火(高崎市根小屋町の鹿島宮)を行うようになった〔高崎市編 1996 14〕(傍線筆者)。これまで、鹿嶋の七日火は昭和50年代にはじまったとされたが、第一回高崎ふるさとまつりで行っていた(8)。

鹿嶋の七日火が花火に選ばれた背景には、高崎ふるさと祭りの成り立ちも関係している。この祭りは「ふるさと」を柱に、高崎地域に伝承されてきた郷土芸能、民俗行事を組み合わせた祭りであった。こうした背景から、高崎地域の夏の民俗行事として定着していた鹿嶋の七日火が、花火部門に選ばれたと考えられる。高崎ふるさとまつりは、昭和60年(1985)の市制85周年を機に高崎市が参画し、それに伴って名称が「高

崎まつり」に改められた。現在の高崎大花火大会は祭りの夜を彩る催しだが、その原点は鹿嶋の七日火であったといえる。

2. 鹿嶋の七日火での準備

(1) 手作り花火から花火師へ

鹿嶋の七日火は地域の人びとの手作り花火であったが、昭和25年施行「火薬類取締法」によって専門の花火師の手に委ねられた。現在、鹿嶋の七日火の花火師は、創業明治26年(1893)の上州玉屋である。創業者は明治生まれの湯浅初五郎氏であった。以前、会社は高崎市浜尻町にあったが、現在は北群馬郡榛東村大字山子田に移転し、有限会社高崎火工場湯浅花火店(以下、湯浅花火店)となった。現在の花火師は湯浅裕氏(昭和27年<1952>生まれ)、湯浅裕一郎氏(昭和53年<1978>生まれ)である。先代の時代から、毎年七日火の行事にかかわっている。花火師が行うのは、万灯に火薬を取り付けることである。万灯を作る拠点となったのが、大きな農家や養蚕農家で、この家をヤド(宿)といった。宿となる家は大きな広い庭を持つ農家で、外に椅子やテーブルを出して接待ができるような家であった。花火師を歓待する習慣は、昭和25年の「火薬類取締法」施行以降、1980年代前半まで続いた。

花火師の湯浅裕氏が中学生であった昭和40年代、花火師であった父の傍について火薬の扱い方や取り付け方などを学びつつ、仕事の手助けをした。万灯を作っている宿の家を訪ねて、火薬を取り付けた。宿の人から、火薬をたくさん付けるようにお願いされることもあった。ある古老は「俺んちにいっぱい花火をつけてくれよー」と豪快に話し、ある宿の人からは「たくさん(火薬を)付けてね」と言われることもあった。少しでも多くの火薬付けることで「他の組(班)より華やかな花火にしたい」と地域で競い合う面もあった。各宿では火薬の付いた万灯を、祭り日まで蚕室内に保管した。火薬の取り付け作業が終わると、宿の家では花火師を招いて、うどん、赤飯、スイカ、茶などのご馳走を出して歓待してくれた。花火師は、順番に万灯を作ったそれぞれ4つの組の各宿に出向いた。火薬を取り付けができると、また次の宿の家を訪ねた。湯浅裕氏によると、4軒のすべての宿でスイカが振る舞われた思い出があるそうだ。うどんや赤飯など、お祝い事の食事がたくさん出て食べきれないほどであったそうだ。

一例として、鹿嶋西の佐藤隆夫氏が宿を務めたときのエピソードをみていきたい。佐藤氏は代々宿を務める家であった。佐藤氏の母親や妻が中心になって、花火師と鹿嶋西の近所の人たちを招き、酒、豆腐、ジュース等のほか、家の裏にある畑で採れたミョウガ、きゅうり、スライスした玉ねぎなどを出して歓待した。このように、同じ班の人たち(鹿嶋西)と集まって飲むことがあまりなかったので、一年に一度の機会に顔見せをした。

昭和から平成へと時代が移り変わるころ、宿の習慣は衰退していく。その背景には、

一年ごとの回り番で宿の当番が回ってきたことが挙げられる。回り番になると「どんなことをやれば良いかわからない」「何をするのだろう」との声がしばしばあった。宿の習慣を把握しないまま、翌年になると別の家に順番が回って來るのである。佐藤氏をはじめ、地元の古老が宿の習慣を若い世代に教えることが度々あった。だが、平成の時代へと移り変わる1990年以降は、宿の場所が個人の家から根小屋第二住民センター公民館に変わった。花火師を歓待する宿の習慣は、地域住民の手作り花火から花火師の手に移ったことで生じた民俗であったといえる。

(2) 絵灯籠と万灯作り

鹿嶋の七日火全体の運営をするのは、令和7年時点で行李持ち、区長、氏子連の4つの班（組）、鹿嶋の七日火ボランティアの会（20名程度）、地元の有志らである。ボランティアは、平成26年（2014）に七日火を後世に伝えようと組織された。人数は20名ほどで年齢は主に60歳以上の人だが、20代の人もいる。七日火を後世につなげようと、地域住民が積極的に祭りの準備や運営に参加している。

かつて、万灯は各組（班）ごとに宿を拠点にして作っていたが、現在は根小屋第二住民センターで各班（組）の班長、鹿嶋の七日火ボランティア会らで灯籠を作る。灯籠は大・中・小の大きさがあり、それぞれ木枠がある。これらの木枠に和紙を糊で貼り、絵や文字を書いて絵灯籠を完成させる。大灯籠（1基）は県道沿いの鳥居に設置し、中灯籠（2基）は参道の階段下と社殿入り口の鳥居に設置、小灯籠（16基）は参道から社殿まで間隔をあけて設置する。小灯籠には地元の子ども達が描いた絵と俳句が楽しめる。灯籠の灯はかつて蠟燭であった。その名残がわかるのが大灯籠で、この翁木枠の内側には3本の釘があり、ここに蠟燭をさした形跡がある。令和6年まで、小灯籠の灯は電球であったが、地元の青年らが「現代的なものを使おう」と令和7年度からLED電球になった。

絵灯籠の準備は3日前からはじまる。令和6年は8月10日が祭り日で、準備は8日から始めた。まずは、絵灯籠の準備をする。午前7時ごろから、佐藤隆夫宅で準備作業が開始した。大灯籠は鹿島宮の倉庫にしまってある。小灯籠は前年度使用したままの状態で、佐藤氏の納屋で保管している。これらすべての木枠を庭先に運び出し、前年度の小灯籠を水にかけ、和紙を剥がしてブラシで木枠を擦る。糊で貼った和紙はなかなか剥がれず、よく水で洗い流す。洗った灯籠の木枠を、軽トラックの荷台に載せ、根小屋第二住民区民センターまで運び、天日干しにする。初日の作業には佐藤氏、7班の各班長、ボランティアの計15名が集まった。準備は絵灯籠を作るグループ（9人）、大灯籠と中灯籠を組み立てるグループ（6人）の2つに分かれて作業をした。絵灯籠を作るグループは、テーブルの上に木枠を置き、刷毛で糊を塗って子どもが描いた絵と俳句の和紙を貼る。木枠の正面に貼った絵の糊が乾いてから、左右側面に俳句を貼る。俳句は数年前に高崎市立南八幡小学校、高崎市立南八幡中学校の生徒から募ったものである。また

同じ年に地元の保育園からは絵を募った。

準備はマニュアルなどなく、すべて伝承者の記憶と経験知による。コロナ禍で何年か休止したが、令和5年に復活した。ある高齢の女性は、「去年はコロナの後で、灯籠を準備するまで時間がかかった。全部終わったのが午後1時半。（コロナ禍が明けて）去年は初めてと同じ。去年は何年かぶりでほとんど忘れちゃってたけど、今年は皆、段取り非常に良いから早いよ」と話してくれた。小灯籠の木枠に「昭和四〇年八月吉日 金沢木工所」と書かれたものが3つあった。地元の古老によると、これは地元で大工をしていた金沢氏の手作りであった。令和7年時点で60年経過した小灯籠である。



写真3 絵灯籠の木枠（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真4 木枠を洗う（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真5 木枠に糊を塗る（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真6 鹿島宮の社殿と樹木（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影

令和6年度の小灯籠絵は、すべて根小屋町第二町内の人たちが描いてくれた。小学生から中学生、一般の方まで、様々な年代の人が鉛筆、クレヨン、ペン、絵の具で描いた。小灯籠絵の募集の声をかけてくれたのは、小学生の子を持つ母親で、子どもを通して友達や知り合いに声をかけることで、16枚の絵を集めることができた。灯籠に貼る絵や俳句を募集するようになったのは、近年のことである。

平成27年（2015）、同28年（2016）にかけて、高崎商科大学商学部の山崎紫生氏が地域活性化のプロジェクトと題し、南八幡地区の地域資源の継承への方策、地域資源を活用した魅力づくりへの一環で、学生を鹿島（ママ）の七日火に参加させた。学生はポスターやチラシの作成、参道に設置する小灯籠絵を描くなど、準備から本番当日までの手伝いをした〔山崎 2016〕〔山崎 2017〕。このとき、新しく引っ越してきた人をはじめ、地域住民にも改めて祭りを知ってもらおうと、山崎氏の発案で平成27年に地元の小学生、中学生から俳句と絵を募集した。小灯籠絵や俳句は、毎年貼りかえると朽ちてしまうため、佐藤氏は将来までを見据えて小灯籠に貼る絵と俳句をパソコン上で保存管理している



写真7 俳句が貼られた小灯籠（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真8 参道に設置された小灯籠（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影

大灯籠と中灯籠を組み立てるグループ（6人）の作業は、まず木枠の大きさに合う障子紙を貼る。少し緩めにすると綺麗に貼れる。大灯籠の絵は『鹿島大明神物語』の主人公である鹿島大明神である。

中灯籠には絵を描くのが好きであった、根小屋町反目東の富岡吉治氏（故人）が描く絵と川柳が入る。吉治氏は小灯籠の絵も描いていた。これらの絵灯籠は、社殿へ続く階段をうっすらと明るく照らし出し、夜祭りには必要不可欠な絵であった。毎年の恒例行事のように時間をかけて絵灯籠の絵を描いた。吉治氏は七日火の季節になると「カシマさん（鹿島宮）がくるから」と、ときには祭礼日の8月7日に間に合うように、一気に小灯籠の16枚の絵、大灯籠の3枚の絵を描くこともあった。ご子息の富岡竹治氏によ

ると、父親（吉治氏）が90才になったとき「俺も年を取ったから」と描くのを止めた。竹治氏が中学生のときから、既に何十年にも渡って絵灯籠の絵を描いていた。退職後には大灯籠の絵を中心に描き、必要な絵具や筆、紙などの道具は、すべて自分でそろえた。絵を描くにあたり、吉治氏はその時々の時代の流れをテーマに、農協雑誌『家の光』などを参考にしながら、季節感を表すような絵を描いた。吉治氏が絵に興味を持ったのは、叔父が絵を描くのが好きだった影響が強かった。吉治氏の絵には、必ずサインのように朱色の線が二本描かれた。病気になり描けなかったときは、白紙だけの紙を出すこともあった。吉治氏にとって灯籠の絵を描くことは、生活の一部であった。現存する吉治氏の絵は、伝統的な七日火の絵灯籠として、佐藤氏が後世に残そうとパソコン上で保存管理をしている。



写真9 大灯籠の障子張り（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影



写真10 鳥居に大灯籠を設置（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月8日撮影

3. 万灯の仕掛け花火とその制作

（1）万灯に書かれた文字



写真11 万灯にめでたい文字を書く（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影

4つの組がそれぞれ自分たちの地区の万灯を作る。万灯の木枠に和紙を糊で貼り、そこに毛筆で書く。大きく奇麗な字で書くのは難しく、なかには練習しあ手本を見ながら書く人いる。班によっては印刷物をそのまま貼る。反目東の場合は、筆で半紙に「家内安全・天下泰平・五穀豊穣・鹿嶋宮反目東」と書く。各万灯には、五穀豊穣や天下泰平のほか、地名などが書かれ、いずれも、その年の繁栄を祈念するものである。この万灯が仕掛け花火となる。令和6年に出た万灯の文字

などの詳細は、下記の表にまとめた。なお、地元での呼称が「鹿島宮」「鹿嶋宮」など統一されておらず、その年の代表者によって、表記は異なる。

【2024年度の万灯 計4基】

反目西	1基	万灯の四方に貼られた和紙の文字は「鹿島宮・家内安全・御祭礼・五穀豊穣」で、すべて印刷物。
反目東	1基	地元の伝承者によると、この万灯は大正時代のものである。万灯の木枠に貼った和紙の文字は、字の上手な人が毛筆で「家内安全・天下泰平・五穀豊穣・鹿嶋宮反目東」と書く。昨年、書いておいた文字（半紙）のお手本を見ながら書く。
下・中・下二	1基	万灯の和紙に毛筆で「家内安全・天下泰平・五穀豊穣・鹿島宮下組」と書く。万灯の木枠は朱色で地元大工の手作りである。
鹿嶋東・鹿嶋西	1基	毎年、宝性寺の和尚に万灯の木枠に貼る和紙の文字「鹿島宮・御祭礼・天下泰平・宮本組」を書いてもらう。宮本組とは、「お宮の下」にある集落のことで、正確には鹿嶋東・西字宮本である。

(2) 花火師の活躍

祭りの当日には、早朝から境内の飾りつけ、祭礼旗、絵灯籠などを地域住民が設置する。午前9時に鹿島宮社殿で山名八幡宮の宮司による神事が行われる。神事には行李と各7班の班長が出る。神事が終わると、本番に向けての最終の打合せを、行李と各班の班長らがする。花火師への連絡や夕方に参拝に来た、子どもたちに配る花火を分配などの役割を決める。各班長は寄付金をくれた人のお札に「鹿島宮御祈禱神玉璽」のお札を祭り当日に配る習慣がある。この後、午前中に一旦解散し、再び午後2時ごろに根小屋第二住民センター公民館に集まる。

次に、七日火の万灯に火薬をつける花火師を紹介する。前述したように、現在は湯浅花火店の湯浅裕氏、湯浅裕一郎氏らが毎年七日火の万灯に火薬をつける。花火で上げる火薬を、玉あるいは煙火玉と呼ぶ。七日火での打ち上げ花火は、三号玉（9センチくらいの煙火玉）のもので引先紫ひきさきむらさきである。一般的な打ち上げ花火の玉は、2.5号から10号である。

花火師は祭り当日の午後2時に、根小屋町第二住民センターに来る。班の人たちが見守るなか、火薬のランス、銀滝、乱玉を取り付ける。七日火の煙火玉は①ランス（赤、オレンジ、青、緑の1組60本で各15本ずつ）で、30秒間燃え続ける。ランスの長さは、26.0センチである。②銀滝（雨に濡れても火が付くように、火薬の部分がビニー

ルで覆われている火薬)。竹の先端につける火薬で、長さは 31.5 センチである。③乱玉(万灯の先端につける火薬)の長さは 42.2 センチである。これらの 3 種類の火薬(煙火玉)を万灯に取り付け、仕掛け花火とする。一つの万灯につき、50 個を目安に火薬を取り付ける。万灯の先端となる十字型の竹の長さと数は、各班によって異なる。短い竹を 2 本組んで十字型にするところもあれば、3 本の竹を組むところもある。3 本であれば、火煙玉を分散して取り付ける。火薬は竹の長さや数に合わせて付けるため、点火した仕掛け花火の火花をよく見ると、火花が多く見えるものもあって、万灯の花火は各班の個性が出る。根小屋町鹿嶋東・鹿嶋西だけは古くからの習慣で、宝性寺(9)へ万灯を運び、そこで火薬を取り付ける。花火師への接待にあたる、宿の習慣はなくなった。現在は、午後 5 時ごろに根小屋町第二住民センターで花火師に食事を取ってもらう。花火師への歓待は、かたちを変えて継続されている。その年によってさまざまだが、好きな出前の食事を選んでもらう、あるいは仕出し弁当を出し、ペットボトルのお茶などを出すようになった。



写真 12 鹿島宮のお札 (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024 年 8 月 10 日撮影



写真 13 竹を 2 本組んだ十字型の万灯 (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024 年 8 月 10 日撮影



写真 14 万灯に火薬をつける花火師 (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024 年 8 月 10 日撮影



写真 15 万灯の竹にランス (煙火玉) を取り付ける (高崎市根小屋町字鹿嶋) 2024 年 8 月 10 日撮影

(3) 鹿嶋の七日火と花火

祭り日の夕方、各組（班）が万灯の仕掛け花火を鹿島宮に隣接する宝性寺まで運ぶ。夕方になって絵灯籠の灯がうっすらと光ころ、花火師が鹿島宮から少し離れた桑畠で、打ち上げ花火を上げる。令和6年度は30発を上げた。七日火での打ち上げ花火は、連續した打ち上げ花火ではないため、次の花火が上がる時間まで、見物客が手持ち無沙汰になってしまう。そこで、行李や区長らが待ち時間を飽きさせない様にと、平成12年（2000）ごろから、社殿にお参りに来た子どもに、手持ち花火を何本か渡すようになった。配る花火は、スーパーや量販で売っている大きな花火のパックで、花火をばらして一人につき5本ほど配る。そのお陰か、近年は親子連れの参拝者も増え、世代を超えて皆で花火を楽しむようになった。最近は、絵灯籠の絵を子どもたちに描いてもらうようにしたこと、父母、祖父母らが絵灯籠を見に来るようになった。三世代が集うような祭りとして賑やかさが増している。



写真 16 手持ち花火を楽しむ子どもたち（高崎市根小屋町字鹿嶋 鹿島宮）

2024年8月10日撮影

続いて、十字型の火煙玉が赤、青、緑、オレンジに光り輝き、滝のようにサ-ッと火花が降り注ぐ。この幻想的な花火に、多くの観客が歓声を上げていた。現在の鹿嶋の七日火は、万灯の仕掛け花火をはじめ、打上花火、手持ち花火、花火一色の祭りとして成り立っている。

午後7時を過ぎると参拝者が増え、境内が慌ただしくなってくる。万灯花火の点火準備が始まるところである。社殿の柱には「令和6年度 鹿嶋の七日火 万燈点火順」のスケジュールが貼られる。これによると、開始時間は午後7時20分（鹿嶋東・鹿嶋西）からで、午後7時30分（反目東）、午後7時40分（反目西）、午後7時50分（下・中・下二）で、10分おきに一基ずつ、計4回にわけて点火する。班の人が手持ち花火を持って「これから火を点けます！」と大声で言い、万灯の柱となる竹の下部に火を点けると、瞬く間に火花が上空まで行くような勢いで達し、万灯の中央に仕掛けられた花火がポーンと大きな音を立てて夜空を彩る。



写真 17 万灯花火を見あげる人たち（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影



写真 18 滝のように降り注ぐ万灯の仕掛け花火（高崎市根小屋町字鹿嶋）2024年8月10日撮影

まとめ

これまで、過去から現在にわたり鹿嶋の七日火の伝承状況をみてきた。とくに、万灯の仕掛け花火の継承者、つまり鹿島宮の氏子による七日火の準備と当日を迎えるまでの一連の動き、そして花火師の役割に着目した。昭和25年施行の「火薬類取締法」を機に、地域の人びとによる手作り花火から、専門の花火師の手に委ねられたことは、万灯の花火を継続していく上では、大きな変化であった。

現在は、時代に合わせた形で万灯の仕掛け花火を出すのは、4つの組（現在の班）で反目西、反目東、下・中・下の二、鹿嶋東・鹿嶋西である。各班が準備するのは、一つが万灯、もう一つが仕掛け花火の骨組みとなる十字型に組んだ竹であった。花火師はこの十字型に火薬を一つずつ、ていねいに取り付けている。専門の花火師が七日火に関わることで、新たに生まれた民俗が花火師をご馳走でもてなすヤド（宿）の習慣であった。如何に地域の人びとが年に一度の花火を心待ちにしていたのか、その心情が理解できるといえる。

地域の人びとが、七日火を心待ちにしたエピソードに、根小屋町の養蚕農家の話がある。昭和40年代の7月下旬から8月初頭、卵から孵化したばかり毛児がたくさんの桑葉を食べる時期である。この季節の養蚕農家は非常に忙しく、主に女性が養蚕に従事した。根小屋町ではお蚕のことを「オカイコサン」と「さん」をつけて呼んで、ていねいに扱った。ちょうど宿の当番に当たった場合は、養蚕の仕事が終わってから、花火師をもてなすこともあった。家の女性にとって、家の仕事、つまり養蚕がひと段落つかないと、花火を楽しめるような気持ちになれなかつたのである。そのため、男性らは、仕事を終えた女性がゆっくり花火を見られるように、花火師に時間をおいて花火を上げてくれ

れるように頼んだ。養蚕が盛んであったころは、午後9時ごろまで花火を上げた。この当時は、連続で花火を上げるのではなく、一発上げたら少し時間を取り、次の花火を打ち上げていた。花火の余韻を楽しんだのである。

この七日火の行事は花火を中心に、今日まで継続してきた。娯楽の少なかった時代、農村にとって年に一度の七日火はもっとも楽しみな行事であった。現在、伝承地で聞き書ができるのは、太平洋戦争を経て、高度経済成長期、昭和、平成、令和へと続く地域の伝承状況である。現状では少子高齢化の問題も生じているが、地域の人びとが知恵を出し合いながら、区長や行李を中心に、鹿嶋の七日火ボランティアの会を組織し、万灯をつくる4つの組（班）の人たちが協力し合い、時代に即応して七日火で使用する道具を積極的に取り入れることで、工夫をしながら継続させてきた。鹿嶋の七日火をめぐる民俗は、今後も地域の人びとが主体となることで、伝統行事として定着し、後世に伝わっていくと考える。

【謝辞】

鹿嶋の七日火の調査報告書を作成するにあたり、佐藤隆夫氏、根小屋町第二町内の皆様、湯浅花火店の皆様には、大変お世話になりました。感謝申し上げます。氏名の掲載については、ご本人に許可をいただきました。また、高崎市立中央図書館から「高崎ふるさと祭りの花火」の写真掲載許可をいただきました。以上、記してお礼申し上げます。

《註》

（1）令和7年9月に「鹿嶋の七日火」が高崎市指定重要無形民俗文化財になった。指定名称「鹿嶋の七日火」の「鹿嶋」は鹿島宮（高崎市根小屋町字鹿嶋）が鎮座する地名であり、明治22年市町村制施行による緑塙郡根小屋村字鹿嶋から冠った。なお、本調査報告における「鹿島宮」（高崎市根小屋町）の表記は、鹿島宮の社殿そのものを指す。引用文献に「鹿島」とある場合には、そのことを断った上でそのまま表記する。

（2）令和6年4月4日に佐藤隆夫氏から、筆者は花火と火薬に関連する資料について聞き書をした。その際、火薬の調合やその量を書き留めた古文書などを見たことがあると伺ったが、詳細は不明とのことであった。その後、令和6年11月に高崎市歴史民俗資料館の大工原美智子氏から、花火の火薬の種類とその調合の量を記した古文書のコピーを現代語訳とともにいただきたいが、鹿嶋の七日火とのつながりが確認できなかった。

（3）群馬県地域における鹿島信仰は、利根川上流域に位置する利根・吾妻地域、前橋・勢多地域に分布する。高崎市内で社殿を持つのは根小屋町の鹿島宮だけである。このほかに下佐野町光雲寺の西方にある路傍の石祠に「鹿島宮 大神宮鹿島講中 文政丁亥年十一月吉日 願主河野條右エ門那氷」とある。木部町堀ノ内の元木部城の一角に、鹿島宮の石宮の屋根蓋のみが残る。これらの石造物から、江戸時代後期には高崎地域に鹿島信仰の講集団があったと考えられる〔高崎市市史編さん委員会編 2003 165〕。

(4) ある旧家から発見された古文書は、高崎市歴史民俗資料館学芸員の大工原美智子氏が古文書の内容を読み解き、平成29年ごろ地元で勉強会を6回開いた。この古文書には名称がなかったため、大工原氏が古文書の内容を読み解いたうえで『鹿島大明神の物語』と命名し、翌年にこの本が出た（職名は調査当時）。

(5) 佐藤隆夫氏に、火薬を細かく碎く薬研や調合で使用した道具の状況を尋ねたが、現存していないとのことである。

(6) 戦前に手作り花火を作った人たちに対し、現在の花火師のように歓待をする習慣があったのかは明らかではない。

(7) 昭和50年に、初めて行われた「高崎ふるさとまつりのプログラム」（赤坂町の田中氏提供）によると、開催日は8月17日とあった。

(8) 高崎ふるさとまつりと鹿嶋の七日火の関係を調べている折に、『観光たかさき』vol.167「観光たかさき」高崎観光協会 会報 夏号〈第167号〉（2024年 高崎観光協会）に、高崎まつりのはじまりをテーマとした特集が組まれていたことを知った。記事では、高崎まつりの前身である高崎ふるさとまつりが取り上げられ、当時活躍した2名の方のインタビューと、昭和50年度の高崎ふるさとまつりのプログラムが掲載されていた。

(9) 宝性寺は高野山真言宗の寺院で、元和元年（1615）に開山・重清法印によって創建された。本尊は十一面觀音背像で、このほかに不動明王、弘法大師などが安置される。由緒に木部安楽寺末とあり、かつての本尊は正觀世音であった。境内の石碑に、庚申塔「正徳六年丙申年 六月穀旦」、読誦塔「明和九年辰年 緑野郡根小屋村」、庚申塔「寛政一二年 講中」などがある〔高崎市市史編さん委員会編 2003 482〕。かつて、鹿嶋東・鹿嶋西では花火師への接待を宝性寺でしたこともあったが、いまはそのようなことはしない。

《参考文献》

- 群馬県史編さん委員会編 1982 『群馬県史 資料編26 民俗2』 群馬県
高崎市編 1996 『高崎市史民俗調査報告書第六集 旧市域の祭りと町内会 現代
の祭りとその背景』 高崎市
高崎市市史編さん委員会編 2003 『新編 高崎市史 資料編14 社寺』 高崎市
高崎市市史編さん委員会編 2004 『新編 高崎市史 民俗編』 高崎市
山崎紫生編 2016 『鹿島宮の祭礼を生かした地域づくり 平成27年度 教育研究
活動報告書』 高崎商科大学コミュニティー・パートナーシップ・センター
山崎紫生編 2017 『鹿島宮の祭礼を生かした地域づくり 一地域資源を活用した
寒の山丘陵南八幡地区の観光づくりの試行の一例として一 平成28年度 教育研究
活動報告書』 高崎商科大学コミュニティー・パートナーシップ・センター
山崎紫生編・大工原美智子 解説・佐々木靖子 挿絵 2018 『鹿島大明神の物語』
文科創生研究所